

95年度「北河内地域における生活環境と環境デザイン原理 に関する研究」中間報告総括

Rsearch on Man-environment and its Environmental
Design Principle in Kitakawachi Region

主任研究員：谷口興紀

分担研究員：山村 悟 植松曄子 谷口興紀 竹島祥夫 星野 暁 榊原和彦
奥 哲治 中川 等 浜田ひとみ

全体としての進捗状況は、表-1の如くである。昨年度にはじめて現れた「？」が付いているものが増えている。「？」を付けているのは、「言い切れるか」ということを表す。内容から見ると、本研究テーマのうち、「環境デザイン原理」に関わってくるものである。つまり、「デザイン」は何らかの意味で「もの」の存在化（創造）に関わるが、「もの」を存在せしめることはどのようにして可能かということを考えようとすると、その「もの」の存在以前の地平に立つ必要がある。「もの」は孤立して存在しているのではなく、相互に関わり合っている。したがって、特定の「もの」の存在以前の地平に立つということは、すべての存在するものの外に立つことを意味する¹⁾。

創造については、古代ギリシャの「有からの創造」（ルクレチウス）からキリスト教の「無からの創造」までの幅があり、認識論的には、現代論理学者クワインによる、或る「もの」が存在するとは、量記号で束縛された変項に入ることであるという規定がある。

「全存在の外に出る」とは、存在するもの以外に存在するものは無いので、「無」の立場に立つことであると言えよう。しかし、有に取り囲まれて生活している我々は、どのようにして「無」の立場に立つことが出来るか。そのヒントの一つとして、生全体（すなわち全作品）を対象にするという視点が提出されている²⁾。しかし、無について語ることは、西谷に倣って「有の側から表象された無」についてであるというただし書きを付けねばならない。

分担研究の広がりを探る。高齢化社会というテーマについて老人保健福祉計画事業のうち、大阪府下のデイケアセンターの分析がなされている³⁾。北河内は、2.64施設／老人人口1万人で、大阪府下で最も多いことや作業・日常動作訓練室で過ごす時間が一番長いことなどが明らかにされている。次に、教育環境というテーマが深められ、制度・場所・空間という3軸上で幼稚園（Kindergarten）の意味付けがなされ、「遊び」（Gabe）と「園」（Garten）との関係が、「空間の構成」という点から思索されている⁴⁾。「菊花」を主題とする遊びの世界としての「ひらかた菊人形」が「人形」をキーとして深められている⁵⁾。これは、世界創造としての「子どもの人形遊び」との関連などへと展開され得る。植物である「綿」・河内木綿の研究も継続的になされており、栽培（有からの創造）・紡

織（有からの創造と無からの創造の間）などについて研究が進められている⁶⁾。

「住宅」をキーワードとしてみると、鉄道の発達と住宅地の拡大との時間遅れ、道路網の発達と社屋・工場の設置との同時進行性などが調査され⁷⁾、また路傍祠の分布と神社の分布と人口との関係などが調査されている⁸⁾。住宅地の景観について、言葉による表現という点から研究がはじめられてる⁹⁾。やがては、「住宅地」などというカテゴリーの再編にまで深められることが期待される。

今年度は、本研究の大テーマである、「研究」の立場と「デザイン」の立場とのリンクに関して一歩進んだように思われる。昨年度は、「寸法を押さえるという観点」と「パースペクティブ」という観点を提出したが、今年度は、「無限に向かって有限に還る」という観定の提出と言えようか。

注)

- 1) 谷口興紀：北河内地域生活環境情報ネットワークノードに関する研究
- 2) 星野 暁：泉佐野市総合文化センターアート計画を土台とした環境オブジェ制作研究
- 3) 竹嶋祥夫：大阪府下におけるデイサービスセンターの類型別動向と室構成
- 4) 奥 哲治：学校教育と地域環境のかかわりに関する基礎的研究と具体事例（北河内地域）の調査研究
- 5) 山村 悟：北河内地域各市における公共空間の視覚的アメニティに関する批判的研究（広場・公園・ニュータウンの造形物を中心として）
- 6) 植松曄子：北河内地方におけクラフトと生活環境空間について
- 7) 中川 等：北河内地域における伝統的住環境と民家に関する研究
- 8) 浜田ひとみ：北河内地域における路傍祠に関する調査研究
- 9) 榊原和彦：北河内地域における環境デザイン手法の操作モデルに関する基礎的研究

表-1 研究の進捗状況（1993年度枠組一部修正）

環境領域区分 学術の区分	理念・ロゴス 作業・ワーク	カテゴリ 以前・非表象	歴史・文化 (通時的) 未来史 生活史 建築史 集落史 都市史 産業史 その他	個別テーマ (共時的)				
				場所的分節		地域分節	地球基盤	情報分節
				生活分節	空間分節			
学 系 術 系	資料 収集	リ?	イ i p ロ I P 山 T 3 5 植 8	m H 7	e h H M ト 竹 奥	m i M I 8 浜 竹 浜	m I	i h I 8
	整理 ・ 解説		イ p ロ P T チ l 山 5 植	m H	e h E H M ト 竹 奥	m p M I ト 竹 中 浜		
	調査 ・ 研究	谷?	イ p ロ P ハ l 山 中	ハト l	e h E M A 2 ホト 竹 奥 榑	p P A l チホリ ハハ 竹 中		4 ニチリ
	計画 ・ 提案	星?			e 7 ト 奥			4 ニ
	教育 ・ 養成			T				

漢字：1995年 カタカナ：1994年度、数字：1993年度、英大文字：1992年度、英小文字：1991年度
 i, 1, P, p：川上 貢：北河内地域における建築生産に関する史的研究
 ロ, 2, A：山村 悟：北河内地域各市における公共空間の視覚的アメニティに関する批判的研究
 (広場・公園・ニュータウンの造形物を中心として)
 ハ, 3, T：植松暉子：北河内地方のクラフトと生活環境空間について
 ニ, 4, l, i：谷口興紀：北河内地域生活環境情報ネットワークノードに関する研究
 ホ, 5,：竹嶋祥夫：北河内地域における高齢者の住環境と生活に関する研究
 ヘ, 6, M, m：榑原和彦：北河内地域における環境デザイン手法の操作モデルに関する基礎的研究
 ト, 7, E, e：奥 哲治：学校教育と地域環境のかかわりに関する基礎的研究と具体事例(北河内地域)の調査研究
 フ, 8, H, h：中川 等：北河内地域における伝統的住環境と民家に関する研究
 リ, 9,：浜田ひとみ：北河内地域における路傍祠に関する調査研究
 星野 暁：泉佐野市総合文化センターアート計画を土台とした環境オブジェ制作研究

分担研究報告

北河内地域生活環境情報ネットワークノードに関する研究 谷口興紀（工学部）

本地域の生活環境情報ネットワークの一つのノードとして、「北河内研究データベース」の設計に取り組み、その過程で、前年度の各種の地域データを平面的分布図に表示するサブシステムを受けて、各種データ（諸施設・地物等）の空間的分布図を単に上空飛行的、平面図的分布としてだけでなく、透視図的分布に描くというプログラムの開発に取り組んでいる。このシステムの特徴は、単に平面図とその高さを与えて、分布図の透視図を描くだけでなく、描かれた透視的分布図上での変更を可能にするものであり、透視的分布図上での変更結果が、平面図の変更と高さの変更（立面図の変更）へとリンクされるものである。

分布図を描くということは、さまざまな情報を集めるという機能を持ち、分布図作成の当初の意図とは異なった意味付け・解釈が可能となることにおいて、「情報」を生かす点で非常に有効である。一方、「情報」とは、「在るもの」についての情報であり、「在るもの」の外に立っている。したがって、本分担研究のテーマは、「在るもの」を直接研究するのではなく、在るもの「について」研究する。「在るもの」の上に立つのではなく、「在るもの」の傍らに立つ。これは、「在るもの」を研究する立場からは、「在るもの」ではないものの研究と言えよう。科学は、「在るもの」を目指して研究するので、「在るもの」でないものの研究は、科学の道から外れるとも言える。「在るもの」ではないものは、科学的表象作用の視圏のなかでは、無としてのみ自己を提示しようという観点、言い換えれば、「在るもの」でないものに関わるとは、全体としての存在するものの上に超出するということである。全体としての存在するもののほかには、存在するものは何もない。故にそれの上に超出することは、現存在が無のうちへさしかけられてあることを意味するのである。・・・しかも現存在は、そのように無の中へ自らを差し込んだまま自らを保持しているが故にこそ、「存在するもの」を越え得るのであり、また存在するものに関わり合い、自己自身にかかわるということも出来るのである。（西谷啓治著作集10巻159頁）

というような観点からの研究へと踏み込まねばならないかもしれない。つまり、「環境デザイン原理」の根拠やデザインにおける創造の可能性の根拠を求めようとするならば、他の分担研究が、「北河内地域における『在るもの』の研究」とすると、本分担研究は、「北河内地域における『在るもの』ではないものの研究」という側面に踏み込まねばならないかもしれない。ただし、非デザインの領野に踏み込み道を失わないために、「北河内地域における」という限定を抛り所とする。さもないと、地域の研究とは言えなくなるであろう。

北河内地域各市における公共空間の視覚的アメニティに関する批判的研究 山村 悟（工学部）

1. 分担課題に関しては、守口、枚方、四條畷など各市の公園、広場、ニュータウンの公共空間を中心に、いわゆる「パブリック・アート」「環境造形」の実態調査を順次、継続的に行ってきた。それと並行して、日本では歴史の浅い「パブリック・アート」あるいは「環境造形」の概念と今日的意義をさぐるため、戦後日本の「野外彫刻」史検証の作業をすすめ、まず小論『日本の環境造形—原点としての宇部市と神戸市・比較研究—』（『大阪産業大学論集』人文科学編79号、1993年5月）としてまとめた。

2. しかしその過程で、京阪電気鉄道株式会社経営の「ひらかた大菊人形」が地域発展に果たした役割と、近代日本の初期型マス・レジャーの主役に取り上げられた「菊人形」に強い関心を持ち、平成6年度から、聞き取り調査と資料収集を始めた。

「ひらかた大菊人形」は、1910（明治43）年開通の京阪電鉄が、沿線開発と旅客増の一手法として、興行師や造園業者、人形師らに依頼して同年秋、大阪府枚方市の香里丘陵で始め、その後、京都府宇治や大阪府千里山への短期移転、あるいは戦争による中断などの曲折を経て、1949（昭和24）年から現在地の「ひらかたパーク」で、秋の大イベントとして確立した。この菊人形という催事が枚方市（1947年市制施行）の市街、文化形成に及ぼした影響を調べるとともに、平成7年度は菊花という植物素材による、きわめて日本的な造形のルーツをたどる作業をすすめた。

3. 倉林正次編『日本まつりと年中行事辞典』（桜楓社）や三谷一馬編『江戸年中行事図聚』（立風書房）などによると、菊人形の原型の菊細工は19世紀初頭の文化年間に、江戸麻布で始まり、麻布狸穴や染井、巢鴨などで一時、植木職が競って趣向を凝らしたという。明治に入ってから国技館の菊人形がよく知られ、夏目漱石の『三四郎』には東京・団子坂の菊人形小屋のにぎわいが描写されている。

しかし、平成7年夏から秋にかけて京阪電鉄遊園事業部の古参職員や名古屋城菊人形展の担当学芸員からの聞き取り調査で、菊人形の原型はさらに17世紀半ばから、愛知県高浜市吉浜地区の仏教催事、民衆芸能として続く「吉浜の細工人形づくり」に求めることができた。平成8年3月、現地調査を行い、かつて地元の二つの寺院と熱田神宮に奉納され、保存されている数体の細工人形を見たが、木の根、松かさ、竹皮、棕櫚、苔、稲わら、貝殻などあらゆる日常、身近の素材を自由奔放に使用した、いかにも海辺の農民らしいナイヴ・アートである。毎年5月8日に行われるこの行事は、衰退寸前でようやく1964年、愛知県無形文化財に指定され、秋になると吉浜の人たちは、現代版細工人形師として各地の菊人形展に引っ張りだこだという。5月8日の吉浜、熱田両催事を見たらうで、この件だけを小論にまとめたい。

北河内地域における生活者の環境について 植松曄子（工学部）

北河内地域の代表的な河内木綿を、平成4年より5年度にかけて調査・分析を行い、河内木綿の導入と発展過程・衰退過程を中間報告で述べた。

平成7年度は、河内木綿の綿について考察した。

綿が衣料として重宝されるのは(1)綿の繊維に天然撚りがあるため、繊維相互の抱合力が大きく、そのため紡糸しやすく糸の強度が大きい。(2)繊維が細く長く且つ斉一度が高い。(3)弾力性及び伸長性に富む。(4)繊維に綿蠟を含むため紡績工程が円滑に進行する。また織物として肌ざわりがよく、光沢がある。(5)繊維が中空であるために、保温力が大きく軽い。染料が浸透しやすい。のような特徴があるからと云われている。

綿毛の品質としては、綿毛の長さ、強さ、色、熟度、繊維の織度、斉一度などが問われる。「綿圃要務」(大蔵永常著 天保四年)の「大坂の綿問屋にて綿の善悪を論ずる事」の項から、大和・摂津・河内国の綿について記述されており、河内国の綿は、摂津国の綿より少し色赤き方なれども、大和其外の国に競れば色白き方也。全体糸口にしては、外の国によりも、河内綿の方最上なるべし。とあり、良質の綿が収穫されていたとうかがえる。次に綿の栽培法について「その土地の気候と土の味とを考えあわせて作るようにいわれているが、栽培法は、地域的にも、時代的にも変化や進歩は認められない。

南河内国柏原地方における綿栽培法の事例。

- (1) 「五月」麦の根元に綿の土台を作り、土の中に稲藁の腐ったものをおく。
- (2) 「八十八夜」綿の実を前日より水に浸け、水から上げた果実は、灰を混ぜ手で播く。
- (3) 「綿まびき」3回（あらまびき・なかまびき・たてまびき）
- (4) 「施肥」3回（一番肥・二番肥・三番肥＝止め肥）
- (5) 「水おき」随時。
- (6) 「先つみ」剪手（摘心）をいう。蕾の出来るを蝶がつくといい、その裂をほとぐちといい、その全体を桃という。はつ穂として盆の8月にこれを仏壇に供える。
- (7) 「収穫」一番綿・二番綿として品質を上下に分けてとる。おくれて彼岸のころに咲くものを「彼岸の綿は木綿」といい、木についたまま収穫し、三番綿と云う。綿摘みには、三幅前掛けをかけ、その中へ摘んだ綿をいれる。いっぱいになると綿加護に入れ大八車で家に運ぶ。綿木は天井または納屋の中にしまい乾かして焚物にする。

河内木綿の紡織（手紡・手織）について柏原町史によると、

- (1) 綿くり（綿くり台の上に綿の実をのせ棒と桿で、綿と種に分ける）
- (2) 綿打ち（繰り取った綿を綿打器にかけ、綿の繊維を極細にさばき払って布の上になべ形をつけ一尺位の細竹に巻きつけジンキ（篠巻）をつくる）
- (3) 糸くり（ジンキを糸くり機にかけて紡ぐ）
- (4) 機織（紡いだ糸を枠にかけて総糸にする）

河内木綿は、着尺や蒲団地などのほか、暖簾・半天・酒袋・幟旗なども生産された。元來農家の自給自足の形態であったが、商品化されるに至って、白無地以外に、縞柄・格子柄

・緋柄（織糸を染めてから柄を織り上げる）型染（織上がった布に文様型紙で文様を染める）筒描き（糊筒を用いて手描きで布に文様を描く）等が見られる。

大阪府下におけるデイサービスセンターの類型別動向と室構成 竹嶋祥夫（工学部）

1. はじめに

在宅介護の必要性が唱われて久しく、その主要施設であるデイサービスセンター（以下、デイセンター）も近年急速に整備されているが、その計画指針は未だ明確とは言えない。

本論は今後の施設計画の基礎資料とするため、大阪府下で最近建設されたデイセンターの施設計画の実態を分析する。なお、施設の平面や面積については、大阪府下で平成5年から7年にサービスが開始された施設を対象に、その開設申請書類を中心に分析する。

2. 結果の概要

1) デイセンターは1979年度より施策が実施されているが、1986年度以降急激に増加し、1993年度には全国で4330施設にもなっている。

大阪府下においても同様の増加傾向を示し、1986年3月に8施設であったものが1995年4月現在、154施設になっており、特に1992年度以降の増加は著しい。

類型別ではB型が最も多く、施策実施当初からその傾向は持続している。次いでA型、E型となるが、近年はA型に比べてE型の増加が著しい。また、D型はその数は少ないもののやはり増加の傾向にある。

2) デイセンターと他施設との併設形態は多様であるが、単独設置のものは少ない。特養との併設が多く58.4%を占め、次いで老人福祉センターとの併設である(20.1%)。地方自治体直営のものには福祉センター併設が多い。類型別に特徴が見られ、それぞれ運営母体の特徴を反映している。なお、E型のみ設置は比較的少ない。

3) 大阪府下における分布は、類型別でも数量的にも地域によってかなりの偏りが見られる。老人人口1万人あたりの施設数で比較すると、北河内地域が2.64で最も多く中河内地域が1.34で最も少なく、2倍近くの格差が認められるが、北河内地域にしても新ゴールドプランの目標値(全国で1.7万箇所)に比べると1/5程度の値であり、今後ますますの整備・充実が望まれる。

4) デイセンターの平面計画を大阪府下で収集した最新の47事例について分析すると、標準となる室以外にも多様な名称の室が設置されている。一方、併設施設との共用も可能なため、申請書類上では標準的な室でも存在しないものが多く見受けられる。

5) 主要な各室面積をみると、各室とも施設の介護方針にも依るのか、面積的にばらつきが極めて多い。共用室の場合、申請上の面積合わせ的な要素もある。

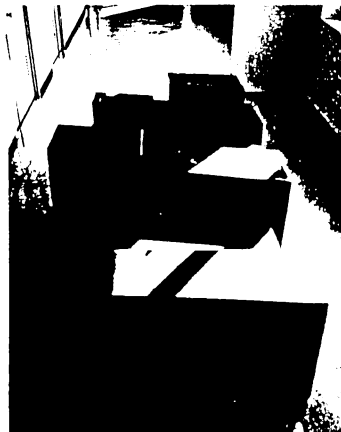
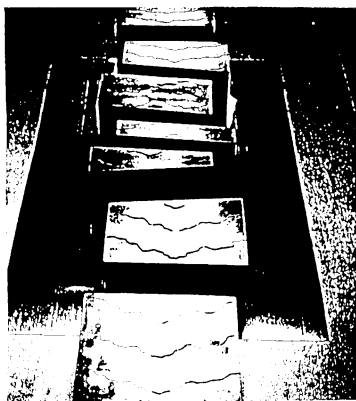
6) デイセンター諸室は過半数以上の施設で複数階に分散しているが、利用の便を考慮

して大半の43施設（95.6％）が1階を使っている。老人が最も多く時間を過ごす作業・日常動作訓練室を中心に、老人がよく利用する食堂、浴室、休養室との階関係を見ると、すべてが同一階にある施設が最も多いが、食堂や浴室が分離している事例も9～10施設（20～22％）見られる。

泉佐野市総合文化センター、アート計画を土台とした環境オブジェ制作研究 星野 暁（工学部）

私の研究参加は昨年平成7年度に始まる。テーマは上記の通りであるが具体的には関西の表玄関として、関西空港開設に伴う臨空タウンをかかえた泉佐野市の都市総合整備計画の一環として発足した泉佐野市総合文化センター建設計画である。内容は、文化センター、図書館、博物館を市役所の隣接地に中庭をかかえるかたちで円環状に配置し、文化ゾーンとして周囲の景観をも取り込んだ環境設計計画である。我々環境デザイナー及び、パブリックアーティストが参加し、そこで受け持つ仕事はそのゾーンの建築物の屋内屋外に様々な素材と形態をとるモニュメントの制作である。ただ従来のモニュメントの形態とは異なり、建築と造園そしてアートの三つのサイドが設計段階より討議を重ねた、総合的文化環境としての空間作りである。そういう建設構想によって進められたモニュメントの一作品の制作が、今回私に与えられた仕事であり、具体的には文化センターの南入口（広場に面している）歩道の右サイドの浅く水のはられた（水位約30cm）プール状のスペースにオブジェを配置し、文化ゾーン全体の景観と具体的なそのオブジェの設置空間との連動を考慮に入れた空間作りの仕事となった。作品はこれまでの私の全作品を対象とし、アートディレクターと私の間で協議した結果、私の初期の作品「表層、深層」シリーズの一点（参考写真1）を選び、その作品を基に新たにその場所の条件、空間、スケールを視野に入れて再構成したものである。制作はまず幾度か現場に足を運びその場の空気に触れることから始め、設計図と模型による完成予定景観を頭に構想を練った。その結果水面を飛び石状に、すなわち一点の塊としてのオブジェを置くのではなく分割配置（インスタレーション）の方法を取った。しかも、周囲は高い建築物となだらかな丘を模した造園が対称的に配置され、高低差もあり変化に豊んだ空間に囲まれている故に、作品もそれに呼応するよう高低差のある形に再構成した。また屋外に設置するオブジェということで強度実験や水中に置くことによるよごれや苔の心配もあり、その実験もした。その結果作品本来の素材、マチエールを損なうことなく、なおこれらの条件を一応クリアできるとの結論から作品は原作同様黒陶技法を用いることとなった。また作品スケールはこれまで経験したことの大きいと重さとなったが、大学の設備を使いクレーンを取りつけることなどを考案して制作を進めた。平成7年度現在作品はほぼ完成したといえる。以下その参考写真及び制作過程、作品写真を添えることで中間報告とします。

参考写真 1



北河内地域における環境デザイン手法の操作モデルに関する基礎的研究 榊原和彦（工学部）

北河内の地域住宅地景観に的を絞って、そのデザイン手法の操作モデルとしての景観デザイン支援システムの基礎となるべき分析・研究として、(i) 北河内地域景観シミュレーション・データベース・システムの構築、(ii) 住宅地景観分析、を行った。

景観シミュレーション・データベース・システムは、以下の種類のデータを取り扱う。

- ① モデリング・データ：(i) 地形データ（海、河川、湖沼等含む）、(ii) 建物データ、(iii) 道路データ、(iv) 鉄道データ、(v) 添景データ（人、樹木、自動車等）、(vi) 計画物データ、(vii) その他（電柱、電波塔等）
- ② テクスチャ・データ：(i) 空中写真データ、(ii) 行政界データ、(iii) 背景データ（空、モニター用写真等）、(iv) 壁面データ、(v) 添景データ、(vi) その他

データの管理方法としては、段階的メッシュ管理方式をとり、座標系は平面直角座標系を採用した。全体システムは、以下のシステムから成る。

- ① データベース・マネジメント・システム：(i) 登録・管理システム、(ii) 検索システム
- ② 3Dデータ作成システム：(i) 地形モデリング・システム、(ii) 建物モデリング・システム
- ③ 2Dデータ作成システム：(i) 画像処理システム、(ii) 2Dペイント・システム

ム

④ シミュレーション画像作成システム：(i) 3Dレンダリング・システム、(ii) マッピング・システム

このシステムは開発途上にあり、本年度はケース・スタディとして大学周辺の1km四方の地域に関して地形データベース、建物データベース、空中写真データベースを作成して、システムの有効性と課題を確認した。

景観分析については、前年度に引き続き、北河内地域における住宅地景観の特徴と課題の把握を行うために住宅地街路景観の特性分析をした。具体的には、住宅地景観の「情景記述」と「景観認識要素」とから「景観パターン」のバリエーションを明らかにすることを目的とする諸調査を行った。まず、対象地域の写真188枚を用いて景観分類アンケートを行い、「景観類型」を得た。一方、アンケートで情景記述をしてもらい、これから景観の「記述パターン」を見出した。見えの類似性にもとづいて得られた「景観類型」と「記述パターン」にもとづくパターン化された「情景記述」（これは、いわば「標準記述」である）とから、「タイプ」の異なる住宅地——(i) 下町風、(ii) 新興住宅地、(iii) 歴史・伝統の感じられる住宅地——の別に、「住宅地景観パターン」とその特性記述を得た。これにより、景観の特徴や解決すべき問題とその方向を見出すことができた。

学校教育と地域環境のかかわりに関する基礎研究と的
具体事例（北河内地域）の調査研究
奥 哲治（工学部）

〔中間報〕

A：基礎的研究……地域環境のもつ教育的な可能性について建築的に関心することは、主に環境の物的空間的場所的な構成と、広義の教育的なことから（人間が人間になるということ）とのかかわりを問うことにある。先に、他者や物とかかわりつつ同時に自己自身とかかわって存在している〈世界内存在〉としての人間の生成のあり方から教育的な環境を人間学的に考察する試みを行ってきたが、自然的歴史的社会的環境としての風土こそ、人間の形成にかかわる環境である。従って風土に根ざした固有の場所性を大切にされた教育と自然と建築の連関を一つの通底したものとしてとらえることが可能な基礎的枠組みを検討する必要がある。その手がかりを幼児教育の創始者であるF. フレーベル(1782-1852)にもとめ、a：教育遊具としての考案された「Gabe（恩物）」とb：制度として設立された「Kindergarten（幼稚園）」の二点の連関に建築的な視点から注目してみた。制度としての〈子どもと大人のための教育施設〉が「Kindergarten」と命名され、植物の生長の場所である「Garten」のイメージと重なって構想された点に関心し、教育的行為の場を限定する建築的な「場所」の問題としてこの「Garten」のあり方をさぐってみた。その論点は、人間の〈共同〉と〈生成〉が主題となる、子どもと大人の交わる教育的な行為の場を限定

するもの、つまり、①〈a : Gabe遊び〉がなされる制度 b : Kindergartenと ②〈A : 植物(樹木)の世話〉がなされる場所 B : Gartenと ③〈ア : 物の構成〉がなされる
イ : 空間、場所の構成を、それぞれの本質で通底した連関をもつものとしてとらえようと
する点にある。フレーベルが①教育を②自然のイメージに重ねて構想した、その②自然の
イメージの解釈を介して教育的な場の③建築的な限定のあり方を捉えようとするひとつの
試みである。

B : 具体的調査研究……昨年度に引き続いて、大東市域においてその固有の場所性を形成
している河川空間の復活を、子どもの通学路のネットワークと重ねアイデンティティ形成
空間として蘇生させるための調査研究を行っている。具体的には銭屋川と泉小学校区と
をとりあげ、多様な項目に沿って現地調査を行った。その調査から銭屋川河川空間固有の
場所的な雰囲気や二次元的な統計図として処理し、それら項目の織りなすリズムを場所性
のひとつの特性としてとらえ、その特性を具体的な建築構成のリズムに反映させる手法の
ケーススタディを行った。この手法は場所性と建築構成のあり方を結びつけ、場所の固有
の雰囲気を設計者の恣意を越えて形成する計画手法として可能性をもつものと思われるが、
調査項目、調査項目間の比重のかけ方、計画されたもののフィードバックのあり方等、多
くの課題を残しており、その検討がさらに求められる。

北河内地域における伝統的住環境と民家に関する研究

中川 等 (工学部)

平成3年度より7年度にかけて、北河内地域における古絵図・古地図など近世・近代期
の資料や文献の収集を行い、現在にいたる住環境および民家の形成・展開過程について史
的な考察を加えた。これまでの中間報告で述べたように、3年度は高塀造りと瓦葺き民家
について、4年度は『河内名所図会』について、5年度は近現代の地形図について論考し、
6年度は伝統的住環境に関する現地調査を実施した。

7年度は、地域基盤の整備と住宅地の形成及び両者の相互関係に着目し、特に大東市を
中心とした地域における交通の発達と住宅地拡大の経緯について考察を加えた。

鉄道は、明治28年に片町－四條畷間に浪速鉄道が開通した。これは大阪と北河内を結ぶ
私鉄で、旅客と貨物の運輸を目的とし、石切神社・枚岡神社・生駒聖天・野崎観音・四條
畷神社の参拝客を吸収した。停車駅は、片町・放出・徳庵・住道・四條畷の5駅で、野崎
詣りを配慮して5月1日から10日まで野崎に臨時停車した。

浪速鉄道は、明治30年に関西鉄道と合併し、31年に四條畷から長尾、新木津、さらには加
茂まで全通し、また大阪側の始発駅が片町から網島に変わり、34年に網島－桜宮間が開通
した。明治40年に国有鉄道となり、45年に野崎・鴻池新田駅が開設、大正2年に放出－桜
宮間が廃止され、再び片町が始発駅となった。

明治期における鉄道の敷設は、村落を単位とした近世的な社会構造に大きな影響を及ぼ

したが、当時の地形図からは鉄道を契機とした住宅地の拡大や地域景観の変容はほとんど認められない。大阪市の近郊として急激に市街化が進行したのは、時代がかなり下がって昭和40年代以後の傾向であった。当時、鉄道はすでに地域基盤としてかなり整備されており、44年の片町－四条畷間の複線化、54年の四条畷－長尾間の複線化によって住宅地の拡大が一層促進されることになった。

道路は、明治・大正期に東高野街道や古堤街道など古道の拡幅・改修がしばしば行われたが、道路網が本格的に整備されたのは昭和も戦後になってからである。八尾枚方線は昭和29年に全線開通、阪奈道路は34年に全線開通（降り線は45年完成）、大阪外環状線は44年に大東市域の道路が完成した。まさに高度経済成長のもと自動車輸送の急増とともに道路網が整備されたわけで、北河内地域の市街化、特に企業社屋や工場の設置と併行したものであったことが当時の地形図からうかがえる。

なお、北河内地域でかつて盛んであった寝屋川舟運は、鉄道や道路の発達により衰退し、昭和戦前に影をひそめた。現在では、鴻池堰も作り替えられ、徳庵堤もかつての面影をまったく失ってしまった。

北河内地域における路傍祠に関する調査研究

浜田ひとみ（工学部）

平成7年度は、これまで調査結果に対する考察を各市ごとに行っていたが、7市を全体的に捉えて考察を行い、各市域における路傍祠の分布と人口密度、面積などの関係などから、各地域の固有性をとらえた。路傍祠の分布密度については、市により較差が見られた。

また、「日本書紀」によれば、排仏派の物部氏と崇仏派の蘇我氏との争いで仏教が採用されて以来、神道は仏教と習合したまま庶民の宗教として存在し続けたが、慶応4年（1868）に、徳川幕府がキリスト教を禁じたことを発端とし、維新政府が神仏習合を廃止した。明治の神仏分離令の影響を被り、〈排仏毀釈〉が実行され、神仏癒着の土地柄の鹿児島県などは文化財破壊につながっている。このような〈聖物破壊／イコノクラスム〉が日本で行われたのはこのときだけである。日本神話の神々として、天神（あまつかみ）地祇（くにつかみ）があるが、地蔵は土着の神＝くにつかみであるという説もある。また、神が宿っていると考えた場所の周囲を囲み神聖を保ったところのことを神籬（ひもろぎ）というが、地蔵の祠を仏像神籬と捉え、地蔵は仏教からきたものではなく神道であるという仮説のもとで、北河内地域における神社と路傍祠の数について考察を試みた。

神社の数に関しては、神社庁所蔵の大阪府河内國北河内郡の神社明細帳（明治12年・大正12年）を閲覧し、時代別には次のような結果が得られた。

明治12年の明細帳には3つの町、30の村に、合計137の神社が記載され、大正12年の明細帳には村の合併などから8つの町、11の村に、合計106の神社が記載されている。明治12年から大正12年にかけて、合祀により抹消された神社があるため神社の数は減っている

ことがわかる。神社財産登録として祭神、由緒、本殿（寸法）、拝殿（寸法）、境内（広さ）氏子（数）、管轄廳迄距離の各項目について明記されているが、由緒についてはほとんどが創立不詳となっている。大正12年の神社明細帳による市制以前の神社の数は、守口町3、四條村14、寝屋川町14（水本町3）、交野町9、枚方町13（津田町8）、門真町3、住道町3、合併以前のその他の村36、合計106である。現在の神社の数（昭和53年測量、昭和60年修正、2万5千分の1の地図による）は守口市10、四条畷市9、寝屋川市19、交野市10、枚方市20、門真市10、大東市22、合計100となっており、これらの資料より北河内地域の神社は人口の急増（市の制定以降の総人口において、各市とも昭和40年前後に急増している）には影響を受けず、むしろ合祀によりわずかであるが、減少しているといえよう。現在の分布状況において、路傍祠の分布密度の高いところは、神社の分布密度も高く、低いところについても同様の結果となった。路傍祠も年代のわかるものは極めて少なく、神社に似た発生・存続形態であろう。